

令和7年度 第1回 中城御殿跡地整備検討委員会

中城御殿正門からのアプローチについて

1. 正門からのアプローチ景観の考え方
2. 過年度までの委員意見
3. 正門からアプローチについて

1. 正門からのアプローチ景観の考え方

- 表御殿西側エリアの1階は、正門の外構レベルとの高低差が生じるため、階段及びスロープ等のバリアフリー対策を行う必要がある。
- 敷地内部においては、連続する建物の景観や中御庭に至る景観を重視するため、可能な限り、エントランス広場のスペースやその視点場から建物側への眺望を確保する。
- 正門前は、往時の景観の再現は厳しいことから、来園者の利便性を確保しながら、古写真等を参考に修景を図る。



表御殿西側エリア及び正門廻りの平面図



正門から見た建物外観



中御庭外観

2. 過年度までの委員意見

- 正門からのアプローチの整備については、令和6年度の部会及び委員会にて検討を行っている。直近の会議での委員意見は以下のとおりである。

< 令和6年度第1回中城御殿エリア検討部会（2025年1月10日開催） >

- ・ 表御殿東側エリアを含めた全体が完成したときを見据えて、アプローチや全体動線を検討する必要がある。
- ・ 1/12勾配では、人によっては自力での移動が厳しく、さらにスロープが長いため、適宜踊り場を設ける必要がある。
→スロープの登り始めの位置をずらして踊り場をスロープ全体の中に設けられるか検討する。（事務局）

< 令和6年度第3回中城御殿跡地整備検討委員会（2025年3月6日開催） >

- ・ 正門周辺の外構計画について、西側エリアへのアプローチだけでなく東側エリアの完成までを踏まえて考えてほしい。
- ・ 龍潭通りから正門を見たときに、本来は、楕円形の花壇がヒンブンとしてあって、その奥の木造建物が印象的な見え方となっていたと思われる。西側エントランス前の広場は、唯一まとまった溜まり空間で、特にここから中御庭への見え方が重要で、撮影や眺めるポイントになる。また、ガイドの解説にもすごくよいスペースとなる。そのため、階段を斜めにして段数を減らすなどでスペースを確保する工夫をすることで引きがとれないか。
- ・ 観光客も多いので溜り空間は大事となる。ABC案とも擁壁のようにするのが気になる。
- ・ 花壇に植えられている樹種はなにか。復元のコンセプトに関わる象徴的なものである。花壇を設けないことも考えられる。何のために必要か考える必要がある。
- ・ 階段をスロープ状にして段数を減らすことについて、そういう例はグスクにもよく見られるため違和感はないと思う。溜まりを確保することと花壇がきれいに見えること、そして階段をスロープ状にすることについて引き続き検討してほしい。



< 今回検討のポイント >

- ・ 西側エントランス前の広場に撮影や眺めるポイント（溜り）を設ける。
- ・ 擁壁による圧迫をできる限り低減させる。
- ・ 往時の番所（玄関）前にあった植栽（円庭）をヒンブンとして配置を検討する。

3. 正門からのアプローチについて

- 正門から内部を見た際に、圧迫感が生じることから、植栽（円庭）を正門前に配置し、擁壁の圧迫感の低減を図る。
- 手すり箇所を景観となじむように配慮した材料を選定する。

イメージパース



図① 正門外観



図② 東側外観



図③ 西側外観



図④ スロープ外観

3. 中城御殿正門からのアプローチについて

